

◆ ニュースレター おおば ◆

平成27年8月号

テーマ 『北見市長選挙』

○：桜田市長が逝去された。ご冥福をお祈りしたい。喪に服する一方で、市政の停滞は許されなく、今後、新たな体制の構築が求められる。当然に市長選挙が実施されるわけだが、北見市内で営業する準市民として私見を述べたい。

○：一番懸念されるのは国政・道政とのからみで混乱することだ。先の道議選北見市区は保守陣営の分裂で過熱し、国政との兼ね合いから武部陣営・船橋陣営の代理戦争の様相を見せ、選挙後もそのシコリが残っていると言われている。次の市長選もこの構図が持ち込まれると、他の党派関係、あるいは無党派関係も含め、かなり激しい選挙戦になることは避けられない。どんな候補者が出馬するか分からないが、政策よりも感情論が先に立つ泥仕合のような選挙戦は望ましくない。

○：北見市は合併10周年を迎

える。合併することで目指したメリットは得られたのか、合併したことで失ったものは何か、検証する中で合併北見市を築いて行かなければならない。都市再生・市役所建設問題、住民協働組織の問題等々、課題は山積している。同時にオホーツクの中核都市としての役割、リーダーシップも求められる。

○：そもそも地方自治体首長にとって政党色は必要なのか。国・道との関係において有利、選挙を戦うために有利、議会対策に有利、などの理由があるのかもしれないが、一方で政党色に染まらざるを得ない。これは議会議員にも言えることで、政党色を打ち出すのはいが系列化の中でフリーハンドなどの広域自治体と市町村との違い、市町村でも人口規模の違いがあるから一概には言えないが、市町村レベルでは政党色云々よりも

市民党・町民党で政党色に縛られない方が自由に発想できるのではないか。北見市の規模ではどうだろうか。

○：政治家の定義はいろいろあるだろうがここでは選挙で選ばれる人、とする。とすると地方自治体といえども首長、議会議員は政治家だ。そこでは政治家としての信条が問われる。その信条に沿って政治目的を達成するために、党派に所属、或いは推薦を受けるなどして政治活動を行う。私の場合、美幌町長としての職責を果たすのに特定の政党に所属する、或いは特別の関係を結ぶ必要を感じなかった。ある意味、フリーハンド、いわゆる町民党として職責を果たしたい、と考えて立起した。北見市の規模だとどうだろう。政治信条は勿論、大前提になるが、党派なり、組織、支持基盤といったもののウエイトがかなり高いのかもしれない。出たい人より出したい

人を、という標語があったが、今思うと微妙だな、と感じる。この北見市長選挙はかなり特殊な状況の中で急遽、実施されるだけに、そういう人が居るか居ないか別にして、出たい人も出したい人も、政党とか支持基盤とか、気を遣わざるを得ないだろう。

○：政治家としての政治信条を考える時、地方自治体と国策、時の国政との関係は極めて難しい。自分の政治信条と国策が一致するなら問題ないだろうが、地域の問題、課題が国策と相反すると、その政治信条の実現は容易ではない。沖縄県知事とか函館市長とか、大変な苦勞をされていると思う。振り返ってみると私の現職の時、美幌町では国立療養所美幌病院移譲問題で国とやりあったことがあったが、今やどの自治体でもいつ、どのような問題が起きるか分からない時代だ。国政レベルの問題と地方は別だ、と言いきれない時代

になった今、どう関わるかは別にして、あらゆる問題に政治家としての見識が問われる。その意味では今国会での安保法制の審議が、北見市長選挙前哨戦と時期が重なるのが気になる。岩手県知事選挙では自民党不戦敗の報道もあった。北見市長選挙で影響はあるのか、気にかかる。

○：道新報道では北見市議会にもふれていた。私の経験でも対議会、というのは大変だった。北見の市議会は何回か傍聴しただけで中身を知らないのでコメントは差し控えるが、議決機関としての責任は非常に重い。市長の力だけでは市政は進展しない。選挙後、新市長と議会が丸となって、合併10年の北見市を更に発展させることを期待する。